

鹿児島商工会議所 〒892-8588 鹿児島市東千石町1番38号
TEL: 099-225-9500 FAX: 099-227-1619
http://www.kagoshima-cci.or.jp E-mail: soumu.kcci@sage.ocn.ne.jp
令和7年10月1日発行(毎月1回1日発行)



由緒のあるふるちのお社

日枝神社(薩摩川内市祁答院町蘭牟田)

NPO法人がこしま探検の会 東川 隆太郎

蘭牟田池で有名な地区に鎮座している。蘭牟田池の西側に山王岳という池の外輪山があるが、当社はかつてその麓に鎮座していた。創建年代は不明だが、現在の滋賀県にある日吉佐山神社からの勧請とのこと。江戸期には「日吉山王大権現」と称されていた。明治9年に台風によって社殿が倒壊。明治11年に旧蘭牟田小学校の東側に移され、さらに現在地に明治43年1月12日に移転された。その際現在地には諏訪神社があり、合祀されている。

江戸期の蘭牟田郷は島津家の家臣である樺山家の領地であり、その領主館は旧蘭牟田小学校の場所にあった。現在地の中原は、江戸期の中心地ではなかったが、蒲生や大村方面への交通要所にあたることから、徐々に公共施設などが建つようになり、神社も住宅が密集する地に移されてきたことになる。現在の御祭神は、大山昨命、建御方命、菅原道真公など。前述のように諏訪神社に限らず、蘭牟田村にあった熊野神社や菅原神社も合祀されたために御祭神が多いという事情がある。ちなみに現在の境内は巨木に囲まれて厳かな雰囲気包まれている。また社殿も地域の方々が大切に修補してきている。

現在は休止しているが、当社には「蘭牟田神舞」と称される神楽が奉納されていた。この神舞は、大神舞と小神舞の二つに分かれて行われていたという。大神舞は、天皇の御即位など皇室に關与する行事が行われた年のもので、小神舞は例祭や夏祭りなどの通常祭事の時のもの。大神舞となると舞台装置の装飾や規模も大規模となり盛大に開催されていたという。明治31年の大神舞の記録によると、演目は宮入から御崎舞まで19演目であった。演目の背景にある物語は神話であり、天岩戸やスサノオノミコトが登場する。15番目の演目は、神賀と呼ばれているが、これは他地域では田之神舞にあたるもので、聴衆の笑いを誘う滑稽な演目であったという。最後の御崎舞は、榊に傘の切紙をつけて巫女が舞うという蘭牟田神舞独特の演目であった。

貴重な神舞があったことを静かに伝えてくれる境内の雰囲気を感じに、お参りしてほしい神社である。

「経験」が人を育てる 人が企業を先導する

企業の大小や年齢の上下、性別に関わらず
平等に「経験」が与えられる交流と研鑽の場



御社の大切な若手を
鹿児島YEGの仲間として
ご紹介ください

鹿児島YEGでは、多様な業種の経営者をはじめ
企業の中核を担う従業者、一人で事業を営む
個人事業主など様々な会員が活躍しています。
普段の業務では接することのない人々と
密接に関わり、協力し、交流して
若手の経験値向上に
役立てませんか？

新入会員募集！

鹿児島商工会議所青年部（YEG）は、事業意欲あふれる新入会員を募集しています。青年部活動や異業種交流を通じて、経済人として一段の成長を図りたい方はぜひご加入ください。

青年部は平成4年9月の設立以来、あらゆる業種の方々が入会し、現在会員140人（令和7年3月1日時点）で活動しています。鹿児島の地域づくりを考え、経済人としての人格と教養を高めるほか、委員会活動などで会員相互の啓発や親睦を深めるための活動も行っています。令和6年10月には約2900名の登録があった九州ブロック大会を鹿児島で開催するなど、活力ある地域経済社会の実現に向け全力で取り組んでいます。

詳しくは青年部事務局までお問い合わせください

お問い合わせ 鹿児島商工会議所青年部 TEL099-225-9534

YEG HP



潮流を読む

「大規模な地銀誕生による業界再編なるか」

前回のコラム「地方圏からの預金流出のメカニズムとその影響」では、地方からの預金流出が地域金融機関の果たすべき金融仲介機能とビジネスに与える影響に言及した。今回は、それを踏まえた上で、地域金融機関、特に上場している地域銀行（上場地銀）の再編の方向性について触れていく。上場地銀でも「預金流出メカニズム」によって、今後、預金基盤顧客基盤の減少が見込まれていく。このため、将来的に、上場地銀は単独で、効率的かつ効果的な金融仲介機能を果たし、自行のビジネスを成長させることが困難になると想定される。とすれば、他行との統合や合併により預金基盤を拡大して、規模の利益を追求し、経営基盤の効率化を図り、企業価値を向上させることが必要となろう。過去にも何度か地域銀行（地銀）のオーバークンギング（銀行数が多すぎる）問題、地銀の経営の持続可能性に対する懸念などにより、その再編が注目されたが、最近の地銀の再編では、企業価値向上こそがキーワードとなる。

上場地銀の企業価値の代表的指標としては、株価÷1株当たり純資産（純資産÷発行済み株式数）で求められる「PBR（株価純資産倍率）」が挙げられる。株価が1株当たり純資産の何倍ぐらいの水準にあるかで企業価値を測定するものである。通常、

1倍以下、つまり株価が純資産の簿価（1株当たり純資産）の場合、企業価値が低いといえる。日々の株価が変動するため、一概にはいえないが、大部分の上場地銀のPBRは、1倍を大きく下回っている。これらを踏まえて、上場地銀のPBRと預金残高の二つの関連性を見る散布図において関係の強さを示す決定係数に着目すると、5年前（2020年3月末）の0.05と比べて、直近（25年3月末）では0.56となり、預金残高が大きくなるほど、企業価値が高い関係があることが分かる（注1）。

直近の散布図において、上場地銀の預金残高の大きい順から、第1グループ（預金残高が約16兆円から約20兆円）、第2グループ（約8兆円から約14兆円）、第3グループ（約7兆円以下）の三つに分類し、上場地銀同士の再編のシナリオを以下に三つ想定した。最近の上場地銀同士の統合などの再編の事例によると、第2グループの上場地銀同士の統合が見られ、その結果、第1グループに分類される上場地銀が誕生した。つまり、第2グループが第1グループまで預金規模を拡張する戦略、これが上場地銀の規模拡大の第一シナリオである。第二シナリオとして、第1グループの地銀が県内の上場地銀、あるいは隣県・他県の上場地銀を傘下に収める拡張戦略である。将来的には、第

一シナリオ、第二シナリオを軸に拡張戦略が取られると想定される。第三シナリオとして、第1グループに属する地銀同士、あるいは第1グループと第2グループの地銀の統合による預金残高が30兆円程度の地域を超えた大規模地銀、いわゆる「スーパーリージョナル・バンク」の誕生である。これは、過去の地銀統合の事例にはない、想定外の統合も含まれよう。ちなみに、前記の地銀のPBRと預金残高の散布図から近似曲線を伸ばしていくと、32兆円程度でPBRが1倍を超えてくる。

規模だけ大きいスーパーリージョナル・バンクの誕生だけでは、長期的な上場地銀の生き残り戦略としては十分とはいえないのではないだろうか。例えば、すでに50兆円を超える預金残高を有するりそなホールディングスは、りそな銀行と埼玉りそな銀行を軸に、都市部の地銀を傘下に収め、また、地銀にバンキングアプリ（注2）や資産形成商品などを提供すること（地銀にテクノロジ、金融商品を提供するプラットフォームマーの役割）を通じて連携することで、リテールの預金基盤を拡大していく戦略を取っている。まさに、同社は大手銀行グループでありながら「スーパーリージョナル・バンク」としての事業モデルを進化させている。このことから、今後誕生する可能性のある「大規模地銀」の企業価値向上を目指す先駆的存在といえるのではない（8月20日執筆）。

〔注1〕内野逸勢、森駿介「金利上昇下における預金基盤の重要性の高まりと預金を制するものは金融業界を制す

」大和総研調査季報2025年夏季号（Vol.59）、p.40図表2参照。
https://www.dri.co.jp/report/research/capital-mkt/it/20250724_030167.html

〔注2〕銀行の預金口座などの利用者がスマートフォンやタブレットを使用して預金口座を管理し、自身の金融資産・負債の状況を表示し、決済などの取引を実行できるようにするためのソフトウェア・アプリケーション。

株式会社大和総研
 金融調査部 主席研究員

内野 逸勢



内野 逸勢
 （うちの・はやなり）

PROFILE

静岡県出身。1990年慶応義塾大学法学部卒業。大和総研入社。企業調査部、経営コンサルティング部、大蔵省財政金融研究所（1998～2000年）出向などを経て現職（金融調査部 主席研究員）。専門は金融・資本市場、金融機関経営、地域経済、グローバルガバナンスなど。主な著書・論文に『地銀の次世代ビジネスモデル』2020年5月、共著（主著）、『FinTechと金融の未来～10年後に価値のある金融ビジネスとは何か？～』2018年4月、共著（主著）、『JAL再生 高収益企業への転換』日本経済新聞出版、2013年1月、共著。IAASB CAG（国際監査・保証基準審議会 諮問・助言グループ）委員（2005～2014年）。日本証券経済研究所「証券業界とフィンテックに関する研究会」（2017年）。

trend communication

トレンド通信



「シニア世代のマインドがまちの活気を左右する」

空き家をリノベーションしておしゃれな店がどんどんつくられ、移住者が増えている地方都市があるというので訪ねてきました。長野県の小諸市は人口約4万人。県の東部に位置し、御代田、軽井沢を挟んで群馬県から東京に通じるルート上にあります。北陸新幹線では、軽井沢駅と上田駅の間、佐久平駅が最寄りとなりますが、佐久平は小諸市ではなく隣の佐久市にあります。ちょうど新幹線が小諸市を避けるようにぐりと南に回り込んでいます。近年は新幹線が通る佐久市に大型商業施設ができたこともあり、在来線の小諸駅を中心とする市街地にはシャッター店舗が目立つようになっていました。

そんなまちがこの数年で活気を取り戻し始めています。行政と市民が連携して空き家などに移住者を積極的に受け入れ、おしゃれな店舗を次々と誘致する「おしゃれ田舎プロ

ジェクト」を始めたのです。その結果、ここ数年で、このプロジェクトを経由して約30店舗、それ以外のルートを合わせて70ほどの新しい店が小諸に生まれています。レストランやカフェ、花屋、雑貨屋、洋裁店、パン屋、ハム・ソーセージの専門店、ゲストハウスなど、その内容も多彩です。

そんな移住者が開いた店の一つであるパン屋「保時鳥（ホトトギス）」の平井さんに話を聞きました。横浜の食料品を扱う店で働いていましたが、いずれ製造方法や原材料にこだわった付加価値の高いパンの専門店を開業したいと考えていたそうです。東京・有楽町にある長野県の移住相談窓口で、やりたいことを話す

と小諸市を紹介されました。移住・開店に当たっては下見に訪れた1日で、物件だけでなく改装業者や先に移住した先輩たち、地域の金融機関の担当者なども紹介してもらったそうです。石材店を改装した

店舗に新たに石窯を設置し、長野県産小麦と天然酵母を使うパン屋を2023年3月に開業しました。週末しか営業しませんが、いまや市内だけでなく軽井沢や上田といった周辺地域からもお客さんが訪れる名店となっています。

この店の近くにある地域の交流拠点「北国街道与良館」にボランティアで駐在している地元シニアの皆さんに、保時鳥についてどう思うかを聞いてみました。売り方も品ぞろえも価格設定もそれまで地元にあったパン屋とは大きく違うため、当初ビジネスが理解できず戸惑いもあったようです。しかし店主の平井さんとは家族や親戚のようにいつも親しく付き合い、「とても感じのいい若い世代の仲間で、地元に新しい活気を運んでくれて感謝している」と言います。

地域によっては、シニア層が移住者の事業の足を引っ張ったり無視したりする所もあるようです。小諸市

は、もともと商業集積地でいろいろな人が出入りすることに慣れていた。移住者をまちの貴重な戦力だとリスペクトする地域のシニア層のマインドが、次々と新しい店がつけられ、活気生まれる要因の一つになっているのだと感じました。

渡辺 和博

地域経済アナリスト／コンサルタント



Watanabe Kazuhiro

わたなべ・かずひろ

PROFILE

合同会社ヒナニモ代表。1986年筑波大学大学院理工学研究科修士課程修了。同年日本経済新聞社入社。IT分野、経営分野、コンシューマ分野の専門誌の編集を担当。その後、日経BP 総合研究所 上席研究員を経て、2025年4月から現職。全国の自治体・商工会議所などで地域活性化や名産品開発のコンサルティング、講演を実施。消費者起点をテーマにヒット商品育成を支援している。著書に『地方発ヒットを生む 逆算発想のものづくり』（日経BP社）。